

森は水の源(みなもと) 水は命(いのち)の源 川は命のつながり

～上流は下流を思い、下流は上流に感謝する木曾川・飛騨川・愛知用水の交流・連携を～

私たちが、いつも飲んでいる水、いつも使っている水は、どこから来ていますか。川の水ですか、それとも地下水？ 私たち人間は「水で出来ている！？」、本当でしょうか！？

大人の約60%は水、赤ちゃんは80%前後、高齢者は50%前後です。では、犬は約60%、猫は約70%が水分です。魚は約75%、クラゲは96～97%が水です。スイカやトマト、きゅうりは約90%、バナナは？ みかんは？

私たちは一人あたり1日に、どれだけ水を使っていますか？…250リットル前後です。

飲み水、トイレ、お風呂、洗濯、掃除…に使って、私たちは暮らしています。

多くの生き物にとって水は「命の水」です。

こんなやりとりを地元の小学生の皆さんと生物多様性や自然環境保全などをめぐって話し合う機会がこの間あります。

地球は「水の惑星」です。地球にある水は13～14億km³。その97.5%は海水、残りが淡水で、その2.5%の70%は氷(北極や南極など)、川や湖沼、地下水は0.8%。この1%弱が私たちの「命の水」です。

私たちが暮らしている「かけがえのない地球」に80億の人びとが生きています。人間だけではありません。さまざまな動物や植物が生きています(生息・生育)。

動物で125万種、植物で30万種が分かっていますが、地球上にはさまざまな環境に適応した多様な生き物が3千万種いるといわれています。

動植物から細菌などの微生物まで、いろいろな生き物がつながりあって地球で生きています。「宇宙船地球号」です。

戦争はいろいろな生き物の命を奪い、環境を破壊しています。「戦争は『権力災害』です。…トルストイは『外交官が解決できなかった問題が、火薬と血で解決されるわけがない』と言いました…」「愚かなことに、150年前から権力者は外交の失敗を戦争で補ってきたのです。…」と中西進氏(国際日本文化研究センター名誉教授、『災害と生きる日本人』潮出版社)は述べています。

直ちに、殺戮行為である戦争を止めるべきです。私たちは「小さな声」を重ねて、つながっていきましょう。2月24日、雨の中で「ウクライナを守れ」「子どもを殺すな」「戦争をやめろ」…を訴える名古屋で行なわれたデモ(日本ウクライナ文化協会呼びかけ)に参加してきました。

私たちは木曾川、飛騨川の水の恩恵を受けています。「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」を合言葉に、木曾川流域の上下流交流を多くの皆さんのご支援・ご協力で今日まで取り組んできました。

“人が動き、モノが動き、ココロが動いて”関係が積み重なっていく木曾川上下流交流・連携を取り組んでいきます。これからも木曾川・飛騨川・愛知用水流域の上下流交流・連携をゆつくりと持続的に一層進めていきます。皆さんのご支援、ご協力をお願いします。(かわさき)

「争いをしないこと」「話しあいで解決すること」「他人を尊重すること」

1992年6月、ブラジルのリオデジャネイロで国連・地球環境サミットが行われました。その場で、日系カナダ人で12歳のセヴァン・カリス・スズキさんは6分間の伝説のスピーチを行いました。

「争いをしないこと」「話しあいで解決すること」「他人を尊重すること」「ちらかしたら自分でかたづけること」「ほかの生き物をむやみに傷つけないこと」「分かちあうこと」「欲ばらないこと」…(詳細はユーチューブなどをご覧ください)。

平和こそ最大の福祉！ 共に生きる街を！

～斎藤まことさん お疲れさまです。ありがとう～

斎藤まこと名古屋市議員が、4月11日付で退任しました。政令市初の「車いす議員」としてスタートしたのは1990年。それから7期・30年近くにわたって「平和こそ最大の福祉！」「共に生きる街を！」をメインに活動してきました。地方政治から平和を訴え、具体化していくことの大切さや障害者が生きやすい社会は誰もが生きやすい社会だということが市議員・斎藤まことさんの確信です。

みん・みんの会との関係では、2007年11月に発足した全国水源の里連絡協議会会長・京都府綾部市の四方八洲男市長と会い、直接話を聞きたいと綾部市役所に2008年2月出かけました＝写真。そこで木曽川上流域の自治体も全国水源の里連絡協議会に参画しているとお聞きし、その年の夏に木曽川、飛騨川、愛知用水流域のいくつかの自治体を斎藤市議と一緒に訪問しました。

木曽川の水の恩恵を受けている下流域・都市部の私たちが上流域の現実をあまりにも知らないことを痛感して、2008年9月13日に「第1回水源の里を守ろう 木曽川流域集会」を開催。記念講演は四方市長にお願いし、上流と下流の首長によるパネルディスカッションを行いました。みん・みんの会の出発点です。

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」木曽川流域の上下流交流をどのように「カタチ」にしていくか。上流の長野県木曽町にある木曽青峰高校インテリア科の高校生に木曽の間伐材で木製のおもちゃやベンチづくりを木曽広域連合の紹介で、2011年から取り組むことになりました。名古屋市での受け入れ先を斎藤さんが段取りして、東山動植物園、名古屋市科学館、名古屋城などに高校生の作品を贈呈してきました。

斎藤まことさん、ありがとう。これからもよろしくお願いします。



木曽青峰高校インテリア科3年生5人が木製玩具を名古屋市科学館に贈呈

2024年2月24日午前10時半から名古屋市科学館で、木曽青峰高校インテリア科3年生5人が制作した木製玩具5作品の贈呈式を行いました。今回も残念ながら、高校生はオンラインでの参加となりました。名



5人が制作した木製おもちゃ＝2023年1月、木曽青峰高校

名古屋市科学館の瀨瀨館長からお礼の言葉とともに、感謝状が贈られました。

作品名は「ピンボールホッケー」「フリースロープ」「バランスゲーム」「木のコマ」「釣りおもちゃ」で、いずれもブナ材で作られています。「指先の感覚を使いながら記憶力や頭の中でイメージすることなど発育に適したおもちゃを作ることができました。5つの作品が多くの子どもたちに喜んで遊んでもらえれば嬉しいです」が5人からのメッセージです。

私たちは「木曽川流域水源の里基金」の運用として、木曽青峰高校インテリア科に木製玩具やベンチづくりを依頼しています。

2023年度もインテリア科3年生に木製玩具づくりをお願いしていきます。

皆さん、今年度もこの取り組みにご支援・ご協力をお願いします。(事務局 かわさき)

市科学館に5点寄贈

手作り木のおもちゃで遊ぼう

長野県木曾町の木曾青峰高校インテリア科の三年生が、ツノの木で作った玩具五点を、市科学館（中区）に贈った。木曾川上流域で育った木を使い、下流域の子どもたちに遊んでもらおうと、二〇二三年度から続く取り組み。寄贈を受けた同館は二十四日、生徒たちがオンラインに参加する感謝状の贈呈式を開いた。

（戸田絵理、小島哲男）

長野の木曾青峰高生 感謝状受ける

希望した生徒五人が一年かけ、課題研究の時間で一点ずつ作った。若林辰哉さん（心）は、球が転がる様子を見て楽しむ「フリースロー」を制作。途中のレールはシタザタしていたり、うねっていたりどきままま

で、難易度は高め。「木の音が響くのを楽しみながら、何回も挑戦してみたい」と呼びかけた。塚田陽登さん（心）は、円盤を打ち返して遊ぶ対戦型の「ピンボールホッケー」を制作。やすりで台を磨いてワックスを塗り、円盤が滑りやすいようにした。秋月陽翔さん（心）は「木のコマ」を作った。小さな子どもも遊べるよう、台にコマを固定する装置を設け、ひもを引くと発射して簡単に回せる。「コマ遊びを好きになってくれたら」と期待した。

他に生徒二人が、魚釣りを疑似体験できる「釣りおもちゃ」や、ブロックを積んだりして遊ぶ「バランスゲーム」を作った。千種区の市民団体「水源の里を守る会」が基金から材料費を出し、同校に制作を依頼している。二二年度までに二十九点が贈られた。

市科学館で二十四日、感

謝状贈呈式が開かれ、生徒たちがオンラインで参加した。感謝状は、同会共同代表の河崎典夫さんを通じて



後日、生徒たちに手渡される。総務課館長は「素晴らしい作品を毎年ありがとうございます」と謝意を伝えた。

寄贈された玩具は、同館一階のウッディー・アリエラでコロナ禍の収束を見据え、五月のゴールデンウィーク明けまめに遊べるようにする。



●玩具を作った（手前）若林さんと塚田さん、秋月さん。●制作した生徒たちがオンライン参加の中、河崎さんから木製玩具を受ける総務課長。●中区の市科学館で

<『町村週報』をめぐる～その1～>

「木曽川流域住民総幸福度を追求していく」(大江正章さんの言葉)

全国町村会が発行している『町村週報』に出会ったのは、今から10年以上前の2012年7月9日付の『町村週報』のコラムに大江正章さん(コモンズ代表・ジャーナリスト)が「川はいのちのつながり」と題した掲載された文章が最初だったと記憶しています。

大江さんは、私たちが作成した『木曽川流域図』、下流の都市部からの「まなざしの交流・共有」とともに上流域での森や清流を活かした商品を下流域の市民が購入していく「小さな経済」や長野県木祖村で畑を借りて大豆づくりを行い、収穫した大豆で木曽町の小池糰店で味噌造りを行っていることを紹介していただきました。その中で「都市住民の農力・自給力アップと上流域の耕作放棄地の減少を両立させる取り組みだ。これらをとおして、木曽川流域住民総幸福度(Gross Kisogawa Happiness)を追求していくとよいだろう。それは、個人の主観的なものではない。公正かつ環境を守り育てる社会の実現によって多くの人びとが幸福になっていくという意味である」と結んでいます。

今日の地球的、地域的な現実—80億のうち22億の人びとが安全な飲み水を飲んでないこと、地球上の4分の1の生き物が絶滅の危機にあること、気候危機・気候崩壊が加速化していること、貧困・格差などによる不平等社会—から「公正かつ環境を守り育てる社会の実現」「木曽川流域住民総幸福度」を私たちの取り組みの「糧」にしていきたい。(みんなの会事務局)

今後の「会員だより」などで「町村週報コラム」を紹介していきます

大豆づくり味噌づくり 2023年の取り組み

2011年から取り組んできた大豆づくり味噌づくりの活動は今年で13回目を迎えようとしています。

木曽川上下流交流・連携の活動の中で私たちの「行きつけの場所」をつくり、下流域から上流の「農」の取り組みをとおして、上流域における困難を身をもって感じ取れたらと思って取り組んできました。

私たちの取り組みに対して、辛抱強く支えてくださっている笹川さんをはじめ木祖村の方々に改めて感謝したいと思います。

なぜ大豆を作ろうと考えたのか。それは大豆が古くから栽培され、食の基本ともいえる様々な食品に活用されているにもかかわらず、自給率が極めて低くなっているという事実を知ったからです。

大豆を原料とする豆腐、味噌、しょうゆ、煮豆、納豆、油揚げ、きな粉、豆乳等はたんぱく質が豊富で重要な栄養の供給源の一つです。

以前は30%を超える自給率を保ち「1952年には76%であった」との研究報告があります(2008年3月『食品経済研究36号』)。1961年の大豆の輸入自由化にともない自給率は急激に減少して90年代には2%まで落ちこみ、その後6~7%で推移しています。国内産の大豆は品質に優れ、ほとんどが加工食品として活用され、加工食品に限れば24%の自給率(2021年)となっています。

「食料は外国から買えばよい」と「加工貿易立国論」の幻想から今、かすかに目が覚めようとしています。農政に振り回され、農業の担い手や農地の基盤そのものが危機に瀕して、10年20年先の農業の姿が上流域に限らず下流域でも描くことが難しくなっています。

でも希望はあります。各地で都市から農山村に若い人たちのUターン、Iターンの活発な動きや、農山村とつながる人々の活動は単なる一時のハヤリではない時代の流れを感じます。2011年3.11を契機とし、また、コロナ・パンデミックを経験して、この流れは全国に広まりつつあるように思われます。そして地域に根差した在来種を守り、減農薬、無農薬の栽培の取り組みも積極的に行われています。

私たちの大豆作り・味噌づくりもささやかながらその一端を担いたいと思っています。

木曽川源流の里・長野県木祖村の畑は標高1,100m。雑木林の隣に180坪の畑です。遠くに木曽駒ヶ岳を望み、夜は満天の星に囲まれます。星座に詳しい人はかえって星座がわかりにくいかもしれません。2等星3等星が明

るくて…。

日帰り参加も可能です。夏は日射しが強く暑いですが、しかし日陰に入れば心地よい風が心まで清々しくしてくれます。「こだまの森」を目の前にして周りは白菜、蕎麦、トウモロコシなどが栽培され、畑作が盛んな地域らしい景色が広がっています。

<作業予定>

5月27～28日	種まき
6月17～18日	苗の定植
7月 8～9日	草取り
8月 5～6日	味噌の天地返し 草取り
26～27日	草取り
9月23～24日	稲刈り体験
10月21～22日	大豆収穫
11月11～12日	大豆の脱穀



木祖村の大豆畑＝2022年10月

名古屋から車に乗り合わせて行きます。

JRでの参加も可能です。宿泊は高原荘です。

皆さんの参加をお持ちしております。

連絡先 近藤 携帯電話 090-4150-6156

映画評

「妖怪の孫」

あらゆる手を使って現政権を守ろうとする内閣情報調査室とそれに同調するマスコミ。それに対して、政策を正面からチェックし、妨害にめげずに追及していく女性記者（東京新聞の望月衣塑子さんがモデル）を主人公にした、強大な安倍政権の闇に果敢に切り込んだ劇映画が『新聞記者』（2019）だ。そのきわどい内容にも関わらず日本映画界は、本作に日本アカデミー賞作品賞を与えた。

この映画を作った映画製作会社スターサンズの河村光庸社長が、2021年7月に執行された参院選挙の施行日に「選挙に影響を与える」目的で公開したのが、当時の菅官房長官を追及したドキュメンタリー『パンケーキを毒見する』だ。現政権批判の映画にも関わらずシネコンで上映された。

その河村さんは去年亡くなったが、生前に企画し、本丸に切り込んだのがドキュメンタリー映画『妖怪の孫』である。本丸とはもちろん安倍晋三氏のこと、妖怪の孫とは「昭和の妖怪・岸信介の孫」という意味だ。安倍晋三の父方（安倍晋太郎）の祖父・安倍寛（1894-1946）衆院議員は、金権腐敗を糾弾するなど清廉潔白な人格者で、大政翼賛会の推薦を受けずに非戦・平和主義を貫いた人物。

一方母方の祖父・岸信介氏（1896-1987）は、満州国で暗躍し東条内閣の商工大臣でありながらも戦犯を免れ、戦後GHQと結びつき、首相となって平和憲法を改悪しようとした人物。

この「母方の祖父」の教えを、思想性もなく己の野心から憲法改正を唱え、保身のためには嘘や不正で誤魔化し、バレそうになると役人に黒塗りや改ざんをさせ、誤魔化せそうになると開き直り、果ては病気を理由に問題から逃げ切る。モリ・カケ・サクラなどの問題の対応が明らかになっている。

映画は、この人物が何者であったのか？日本に残したものは何であったのか？をインタビューを中心に徹底検証していく。特筆すべきはこの映画もシネコンにかかった事。地殻変動がおこりつつあることを願いたい。

（三田 正継）

春の「蔵開き」 4月15日、にぎやかに木曾町で開催

4月15日、3年間通常開催が出来なかった「蔵開き」を、木曾町内の2軒の酒蔵「七笑」「中乗さん」と同日開催で行いました。数日前から雨になる天気予報でしたので、当店隣の特設販売スペースのひさしにビニールを

張るなど、雨対策を含めた準備をしました。そして、予報通りの雨でしたが、さほど寒くはなく、風も穏やかでした。

当日はあいにくの天気にも関わらず、たくさんの方々がいらしてくださいました。コロナ禍で中止や縮小開催が続いていましたが、今年は味噌蔵見学も行い、伝統製法の「味噌玉」が花を咲かせているところを皆さん見に来てくださいました。初めて味噌玉を見た方などは「すごい！なにこれ？」「大変なことをしているんですね」などと興味津々にみても、ご感想をおっしゃっていました。そして今年は多くの外国人旅行客が立ち寄ってくださいました。英語を話せるスタッフの説明に聞き入ってくれ、そしてお味噌などを購入していききました。

販売コーナーでは、当店の味噌や甘酒などの商品はもちろん、当日限定商品、小池の味噌を使った甘食（ぷるまん）や、ラスク（タビタのパン）、フィナンシェ（茶房松島）、そして糀料理づくしの「こぎちゃん弁当」などが並びました。一人一人と声を交わしながら販売して、やっと元の人と人とが対面で接することが出来て良かったなあ。としみじみ感じる事が出来た1日でした。太鼓グループ「中夢楽座」=写真=による演奏は1時間にも及び、合間の軽快なトークに笑ってと大変盛り上がりました。

後日伺ったところ、2つの酒蔵も大盛況だったそうです。そして、たぐち屋さん(当店から徒歩1分)の味噌ジェラートも、木曾町地域おこし協力隊の服部さんの味噌ラーメンも大好評で、たくさんの方々が町内を歩き回ってくださってうれしかったです。(小池糀店 唐沢 裕之)



* 「地域の食文化に誇りをもって自慢してください」(『はっこうのがっこう』より) *

<お知らせ> 6月4日(日)午前10時から午後3時まで、第65回水道週間行事「なごや水フェスタ」が名古屋市千種区の鍋屋上野浄水場にて開催されます。6月1日から7日までの水道週間の中の日曜日に例年開催されてきましたが、ここ数年コロナ感染拡大の中でなかなか難しい状況が続いていました。今年は久しぶりに木曾三川マルシェも通常の規模で行われる予定とのこと。みんなの会は木祖村さんのブースの一角に出店する予定です。普段は見ることができない緩速ろ過施設も見学できます。

是非ご参加ください。みんなの会のブースの応援も大歓迎です。

<2023年度もご支援・ご協力をお願いします>

2023年は、みんなの会にとって、15周年の年にあたります。2008年9月にスタートして、皆さんのお力添えをいただきながら、木曾川流域の上下流交流・連携を取り組んできました。感謝申し上げます。これからをよろしくをお願いします。

<お願い>住所は従来と変わりません。当面の電話番号は携帯番号を利用してください。FAX番号は未定です。後日お知らせします。よろしくをお願いします。

水源の里を守ろう 木曾川流域みんな・みんなの会

連絡先：〒464-0075 名古屋市千種区内山3-7-11
携帯電話 090-4150-6156 (近藤) mail: suigennosato@gmail.com